

# 談話室

## エネルギー・資源問題を展望する リスク研究のめがね

末 石 富 太 郎\*

Tomitaro Sueishi

いまはやりの21世紀論は、高度産業化・高度情報化が中心になっている。これらと脱工業化がいかなる関係にあるのかも気になるのだが、それ以上に、高密度社会・高齢社会のリスクとエネルギー・資源多消費の問題とを統合する戦略がないのがより気にかかる。

20世紀の学術研究は、宇宙から遺伝子に至る広範な分野で赫々たる成果を挙げてきたが、同時に20世紀では、2度の世界戦争、貧富の分極化、公害と生態系破壊、原子力利用の未熟さなどの問題を積み残したままで、disciplineはほとんどが19世紀の遺産によっている。典型はそれぞれ世の中の裏側にあったカネとセックスをテーマにしたMarx経済学とFreud心理学である(笹川 巖『怠けもの思想』1979, PHP)。筆者は、20世紀の日本人が日常の話題にしたがらなかった「リスク」を学術世界にもちこんで、20世紀から21世紀への遺産の一つとしたいのである。

大雑把にいうと後進的社会では、生理的欲求など人間生存の基礎的段階に関心が払われ、自然や食品などの「危険」か「安全」かの二分的発想が有効であった。二分法は日本社会に深く定着しており、中間のグレイゾーンの存在は容認されにくいのが通例である。たとえば原子力行政にとっては「技術は安全」、反対派にとっては「限りなく危険」なのである。

今日二分法の弊害はかなり明確になっている。たとえば筆者らが中心となって開いたリスクに関する日米共同ワークショップでは、彼我の行政熟度の差が弊害の一因として確認できている。原子力リスクの研究には、環境化学物質リスクとも関連させながら、閾値がないという発癌について、高感受性集団の曝露モデルと $10^{-x}$ で表わすリスク確率特性の判定法を組合わせる膨大な研究が必要になる。ただし新しい政策誘導はこれら科学的研究の完成をまって行われるべきものでは絶対ない。このことは、科学的研究を未了として閉

鎖性水域の富栄養化防止策を遅らせた行政が、いま水域の水全部を処理せねばならないようなより困難な状況に遭遇していることだけでも明白であろう。

癌患者と家族と医師が情動的でなく科学的な意思疎通ができるようになること、そして癌問題を越えて、生物としての人間がもつ不安への社会学的接近も必須となる。狼少年モデル(少年が嘘つきか正直かを村人が確信形成していく過程を説明する:松原 望『意思決定の基礎』1977, 朝倉書店)では、狼が来た/来なかった以外の中間的シグナルが確信形成に重要な役割を果たすことが示唆されている。責任技術者が「絶対安全のために努力しているから安全なのだ」という思考様式は、21世紀社会ではもう通用しないのである。

リスク研究者が研究にだけ専念すればいいわけではもちろんない。研究職能の新しいスタイルが必要なのである。1870年頃専門家の仕事の信頼性と権威の確立のために輩出した学会に昔日の面影が失せたことを逆手にとって、次のようなリスク関連の職能を掲げてみればどうであろうか。

大衆社会の付属物に墮しつつあるという大学での一般教育を改革し、「教養主義=反専門主義」の生涯学習教育課程にリスク研究者(特にエネルギー・資源関係者)が積極的に進出すべきである。リスク管理能力こそが新しい教養である(前掲松原著書)。先端技術競争だけの国際関係はリスク管理のギャップにもとづく文化摩擦を引きおこす。市民的常識による分散型意思決定の促進とリスクコミュニケーションを活性化するために、risk mediatorの集団としての職能学会を市民に開放する方式が必要である。西欧で脱原発が進み始めたのは、米国よりも民主主義の先覚だという自負にもとづいているからに違いない(Helmut Schmidt『世界』1988年5月号)。

\* 大阪大学工学部環境工学科教授  
〒565 吹田市山田丘2-1